

めたにも拘らず、世情急変のため
意の如くならず、次第に経営は行
詰り、二十八年遂に閉鎖の已むな
きに立至った。

その後ながく失意の時が続いた
が、数年前から大阪山本楽器店の
輸入業務を委嘱されたので、元氣
に大阪へ通勤を続けた。

故人は頭脳明晰、殊に文筆に長
じた。負けず嫌いで、正義観が強
く、自他共に曲った事を許さない
厳しさは立派であった。その反面
仲々優しい所があった。

故人は趣味の広い人であった。
剣道は三段格、弓道二段、乗馬、
水泳などスポーツをよくした。刀
剣に凝り、立派な鑑識眼をそなえ
自らも何振りかの名刀を所蔵し
た。

書道、俳句、漢詩を好むなど、
古武士を思わせる風格があった。
有馬の奥の三田藩九鬼家々老職を
つとめた家柄がそうさせたのであ
ろう。

そうかと思うと、新しいものが
好きであり、長い海外生活の習慣
で、服装など身だしなみにはなか
なかやかましかった。又洋画をよ
くし、風景、静物、船舶など写実
的な絵を器用に書きこなし、素人
離れした多くの作品をのこしてい
る。

恵まれた五男一女は、皆立派に
成人して家庭を持ち、八人の孫が
出来ている。

長男 重平 神戸高商 名古屋精糖

次男 次夫 高等商船 ジャパンラ
イン

長女 明子 読売新聞社 朝野祐作
夫氏人

三男 哲夫 高等商船 三菱造船

四男 和夫 商船三井

五男 五郎 神戸大学 日商岩井

このうち唯一人次男の次夫君
が、去る四十四年一等機関士とし
て乗組んでいた「ばりばあ丸」の
野島崎遭難に際し、殉職したのは
思ひもよらぬ悲しい出来事であ
った。流石に気丈な故人も非常に落
胆していたのは真に気の毒であ
った。

布引に新幹線の新神戸駅が出来
るので、附近の道路が拡張される
ことになった。熊内町二丁目の住
居が拡張路線に当たったので立退き
を命ぜられた。換地の交渉に随分
手間取ったが、漸くもとの土地
を幾分ずらして交付されることに
決ったので、昨年末、布引中学正
門前の仮設住宅へ一時立退いた。
旧居が撤去され、整地された新し
い土地に、新居建築着工の地鎮祭
を行なったのは、死の直前の二月
末であった。

六月には新居に入れるから、そ
の時は是非泊りがけて遊びに来て
呉れと、あんなに新居の落成を楽
しみにしていたのに、その日を待
たずして急逝したのは、嘸心残り
であったろう。

布引の仮寓に長男の重平君一家
と共に住んでいる澄子未亡人は健
在で、八月中旬新居が落成すれば、
挙って移り住む事になっている。

長光院武嘗壽岳居士のご冥福を
心から祈りつつ擲筆する。合掌。

焼酎王の借金証文

松丸の某家が
家宝として保管

大宮庫吉氏逝く

宿痾の脳軟化症のため去月二十
一日、多彩な八十五年の生涯を京
都市左京区福地町の豪邸で閉じた
宇和島の名譽市民、大宮庫吉翁
(宝酒造取締役会長)の葬儀は二
十七日社葬をもって盛大に執り行
なわれたが、これでまた一つ宇和
島の自慢のタネが消えたことにな
る。

大宮氏は明治十九年四月に宇和
島市野新町井上宇平の三男に生ま
れ、丸穂のお米屋大宮氏の養子と
なったが、明治四十一年三月、二
十二才の時、一代の女傑鈴木ヨネ

の日本酒類宇和島工場に倉男とし
て入社、焼酎ミリンの醸造技術を
習得して大正五年伏見の四方合名
会社に入社したのが出世コースに
乗るきっかけとなった。

実直で努力家で、経営の才にも
非凡なものを見せて次第に頭角を
現わした大宮氏は、やがて宝酒造
と改称された同社の重役陣に抜擢
され、更に社長となって実権を掌
握し、ついに同社をして日本一の
焼酎メーカーに育て上げるほか、
数多くの系列会社を傘下に一大コ
ンツェルンの結成に成功したので
あった。

それを俄かに無配会社に転落し
たのは、タカラビールの醸造に手
を伸ばして失敗したためで、当時
大蔵省の主税局長だった塩崎潤代
議士の斡旋によってビール部をキ
リンビールに譲渡してやっとな路
を開いたことは、読者の記憶にも
まだ生々しい筈である。

以後、ビールで受けた大きな傷
痕のため無配状態が続き、株価も
含み資産に支えられて辛うじて七
十円台を維持するという不振の日
が、いままも続いているが、これを
苦にして死ぬまで社業を養子の隆
社長に委せ切れず陣頭指揮を取
て来たあたり、この傑物の悲劇性
がある。常に氷の如く冷静で、石

橋を叩いて渡る関西流の前垂れ商
法に徹して大成したこの異色の成
功者は、愛郷心が頗る熾烈で、宇
和島市公会堂の建設資金に二千五
百万円を、また自身の銅像の建て
らるる費用に二百五十万円を寄付して
いる。

近畿放送、桃山城観光、比叡
山観光、日本観光ゴルフ、京都観
光センターその他多くの地元企業
に出資して重役に推され、多くの
経済団体の役員として振幅の大き
い活躍を続け、紺綬褒章(八四)

藍綬褒章を授けられ、勲三等瑞宝
章を受けるなど、近畿を代表する
大実業家として名声高いものがあ
ったが、この人にしてただ一つ意
の如くならなかったのは、松丸の
某家に保管される一金百五十円の
借用証書であった。

これは大宮氏が日本酒類宇和島
工場の倉男時代、北陽花街(川端
と呼んだ時代)の美妓と灼烈の恋
に落ちて、払った前借金がこの百
五十円だったのである。間もなく
大宮青年は京都伏見の四方合名に
移って出世コースに乗ったが、身
請けの金を融通した松丸の某家で
は、時効になった後もその証文を
家宝として保管して今日に及んで
いるというから、このたびの大宮

士松の竹馬の友、中村平三郎翁の
経営にかかると中村内外交渉事務所
の社員として鈴木商店へ絶えず御
出入りになり、土地建物等の登記
の仕事の委嘱を享けて、僕の勤務
していた会計部にも屢々足を運ば
れた。

からだの引締った背は高からず
細い眼に銀縁の強度の眼鏡、地味
な紺の背広に少々深い目に被った
中折帽の清潔な白面の万年青年と
云う感じで晩年迄続いた。

白石さんは若い頃から中村翁の
薫陶一筋に生き、あらゆる苦難に
も屈せず十年一日の如く活動力の
実に旺盛な生涯であった事に僕は
敬服の辞を吝まない。

去る昭和二年財界パニックの余
波は不幸にも僕達の鈴木商店にも
及んだ。破綻後の整理に当って
は、白石さんは金子直吉翁の最も
信頼される所となり、日夜膝
つき合わせ後任末に全力を捧げら
れた。

引続き之等鈴木整理に依って台
湾銀行が設立した蓬萊不動産株式
会社に金子翁の命ぜらるるままに
入り、充分なる成果を揚げられ
た、其の当時の蓬萊不動産の幹部
達は異口同音、白石さんの敏腕に
驚嘆の言葉を発したと僕は聞い
ている。

を知らされ病棟の方へ連れて行か
れた。母は寝床から起きあがり小
生を抱えて、祖父父母や皆の云うこ
と聞いて立派に成人するようにと
悟された。暫らく抱いていたが重
いから下りてと云って横になり午
前四時には早この世の人ではな
ったのである。享年二十八才であ
った。生前死の覚悟が出来ていた
のか葬儀一切の持もまで揃えて
いたほど万事に心に豊かさがあっ
たことが今も涙の種である。話は
父に帰りますが、その頃父は台南
より台北の方へ台湾の本拠を遷し
ていたが大正八年引揚げの迄の間
に小生は父の元へ渡った事があ
った。父が手掛けた会社、台湾炭業
台湾拓殖、台湾倉庫、台湾塩業、
東洋製糖等で台湾実業界では活躍
していた様である。

父が引揚げた後小生は大正十五
年台湾嘉義郡南靖庄に在った東洋
製糖本社に赴任していた。当時の
社長は山成喬六氏であり常務二人
は入来重彦氏と大賀基作氏と云う
方であり大変お世話になったこと
を感謝している。

その間小生の一番記憶に残るの
は明治四十二年清国の孫文氏が日
本亡命を希望し、時の右翼の元締
たる頭山滿翁に依頼され、翁は早
速時の政府に交渉せしめ予備金な

き時の清朝の政府大官連中と会談
の上、支店開設の許可を得て天津
上海広東と赴いた様である清国政
府大官と記念撮影したのを見たも
のだがそれも今も思い出の物とな
ったのである。父はそれより台湾
に渡り安平港に上陸して台南に赴
き領台後の台湾に於て仕事をすべ
く金子、柳田両先輩に願ひ許可を
得て台湾駐在員となり先づ台湾の
根拠地として台南に店を開いたの
である。明治四十二年小生は八才
であったが神戸脇之浜の家を後に
同年十二月に台南に母と共に赴い
たのである。店に厳添寿と云う十
六才の台湾人が居て良く遊んで貰
ったものであったがその後彼は第
二次戦終戦後台湾唯一の金満家林
本源を凌ぐ富豪になり今は二代目
が継いでいるそうである。

小生は母が病を得た為明治四十
四年末坂本万吉氏と女中お松が付
添い神戸へ引揚げ須磨の保養院に
入院し此処に於いて介抱の甲斐も
なく母は息を引き取った。その前
母は死期を悟ったものかお松に風
呂を沸かさせ小生と入浴を共にし
たのであるが湯上り後平常通りに
食事と共にしてから床に就いたか
ら小生には母は全快したものと思
い込んでおたが俄然夜中午前二
時頃女中に起され病の変わったこと

氏の死で、また新しい話題となっ
ていることであろう。

聡明貞潔で鳴る現夫人の前身こ
そ、大宮青年の大きな愛の手で苦
界から脱した女性であり、謹直無
比な故人にとっても生涯に一度、
パッと咲かせた大ロマンの花とい
うべく、心から睦み合った六十年
の夫婦愛と人間形成は、筆舌に尽
し難い豊郁たる人間ドラマといえ
よう。

父母の思出

平高弥之助

父が鈴木商店に入社した頃は店
は柴町三丁目北側に在り御本家は
同じ柴町四丁目北側の古風な構え
であった。私は当時東川崎町に在
った杜宅に居住し三才であったが
母によく連れられて御本家へ行き
御家様や岩治郎様夫人の御手伝を
している間御孫様の千代子様や政
江様に遊ばせて頂いた事が眼に浮
んで来て懐しく感じています。母
の政子は御家様と御寮人様にとて
も気に入られていた様であった。

父は田宮様などと共に九州大里に
行っていたが父二十八才の時金子
様柳田様の推挙の下に満州支那に
支店開設の為に赴いたのであるが
大連から奉天へそれより北京に赴

白石求馬さんの面影

柳田 義一

白石さんを識ったのは、去る大
正七年僕が鈴木商店入社の際から
である。当時白石さんは、先代富